

アイデア探検は、挫折した探検か

横山 俊男

探検家と呼ばれる人々が、これまで未知なるものを既知なるものへと書き変えてきた結果、現在では、地球上はほとんど知りつくされた感がある。そうした中で、探検家や学生探検部員は、今後どのような行動をとるべきなのだろうか。ここで関わってくる問題として、純粋探検とはいかなるものをさすのか、ということである。

一般的に、純粋探検と呼べるものは、マゼランによる世界一周航海や、コロンブスのアメリカ大陸発見のようなスケールのものである。そう考えると、探検家が山岳探検に着目した時、既に前記のような探検と同様に純粋探検であろうとするには、少々無理がある。地球上で純粋探検を行なうのが、非常に困難になった今、フィールドは本来宇宙へと移ってゆくべきなのだろう。

ところが、探検家にしても学生探検部員にしても、技術的・経済的に、宇宙を自由に飛び回ることとは到底できない。

純粋探検がほとんど不可能となった地球ではあるが、現在のところ、そのフィールドにしがみついて探検活動を行おうとする者たちが、生きのびてゆく方法は、探検という言葉の拡大解釈しかない。

関西大学探検部においても、多種多様な探検活動が行われている。確かに、そのいずれをとって見たところで、マゼランやコロンブスの偉業に比べると、何ともちっぽけな探検である。世界の未踏峰に立ち、世界の新(深)洞を発見し、世界の激流を下り、世界の未開民族を調査したりしたと

ころで、到底かなわない。しかし、これはしかたのないことなのである。問題なのは、現在我部の主流をなしているこうした探検は、純粋探検ではなく、発想や着眼点を変えた結果生まれた探検であるということ、自覚することである。

しかし、こうした探検できてもフィールドがなくなっている。そうして近い将来、新洞はほとんど発見できなくなり、下るべき川は見当らなくなり、未開民族もみつからなくなっていくであろう。そうした時代に我部としては、これまで行ってきた探検に更に工夫をこらしたものや、少々突飛に感じられるもの、アイデア勝負のような全く新しいものに挑んでゆくことになる。

現在でも未踏ルートによる山岳探検や、水中に沈む考古学的価値のある物を発見する水中探査やカヌーによる海峡横断など、その他にもいろいろとユニークなプロジェクトができてきている。学生の最大の利点である柔軟な思考性を大いに活用した、新しいアイデア探検である。

但し、いかなる探検にも、未知への憧れ、そして体験した時の感動が伴っていないといけない。大切なことは、自分の得た感動をどれだけ多くの人に伝えられるかだ。それが少しでも純粋探検に近づくことになるように思う。

(26代)